

伊勢物語の学問

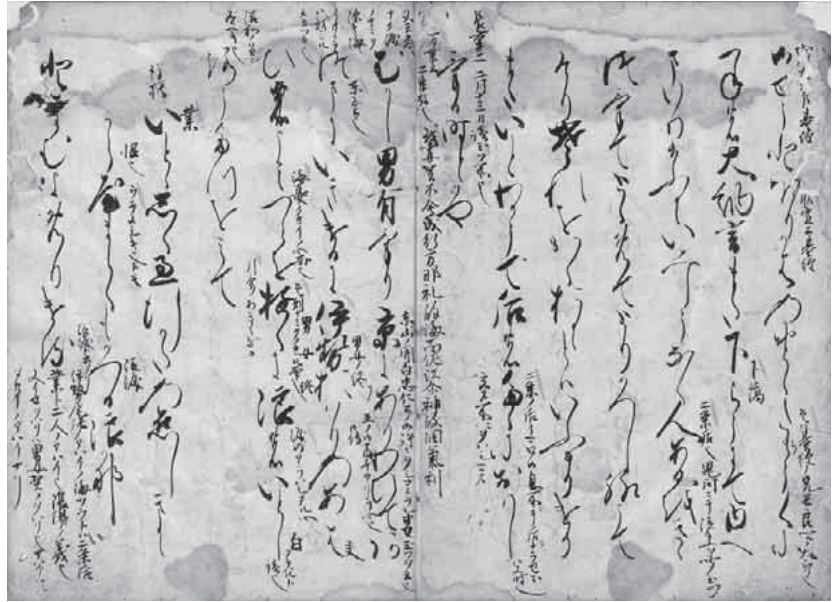
『伊勢物語』の注釈はすでに平安時代末から歌学の一部としておこなわれていたが、注釈書として成るのは鎌倉時代である。「古注」と呼ばれるそれは、『伊勢物語』を在原業平の一代記として、ときに強引に物語を読み解く。すなわち物語の出来事はすべて現実の事件の反映であるとし、主人公業平は色好みの末に何千人もの女性と契りを結んだとされる。

このような古注の方法は、室町時代中期、実証を重んじた一条兼良の『伊勢物語愚見抄』によって批判され、「旧注」の時代を迎える。続いて出た宗祇と三条西実隆・公条・実枝三代の注釈は、おもに講釈の聞書として残るが、色好み否定と教訓的解釈を特色とし、鑑賞にも力を入れた。江戸時代に入り、細川幽斎や北村季吟はこれを集大成した。

江戸時代中期以降の「新注」は、契沖の『勢語臆断』が文献資料を駆使して実証的に注釈したのを嚆矢として、中世の師資相承のあり方から離れて、近代の注釈へと繋がってゆく。

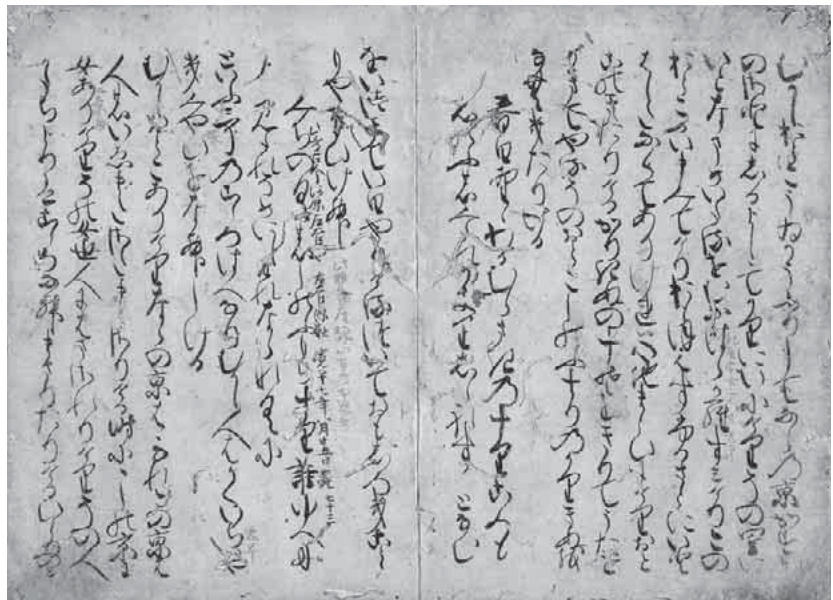
(青木賜鶴子)

〔九八一―一七〇〕
〔室町後期〕写
二・五・五×一七・八 種列帖装一帖



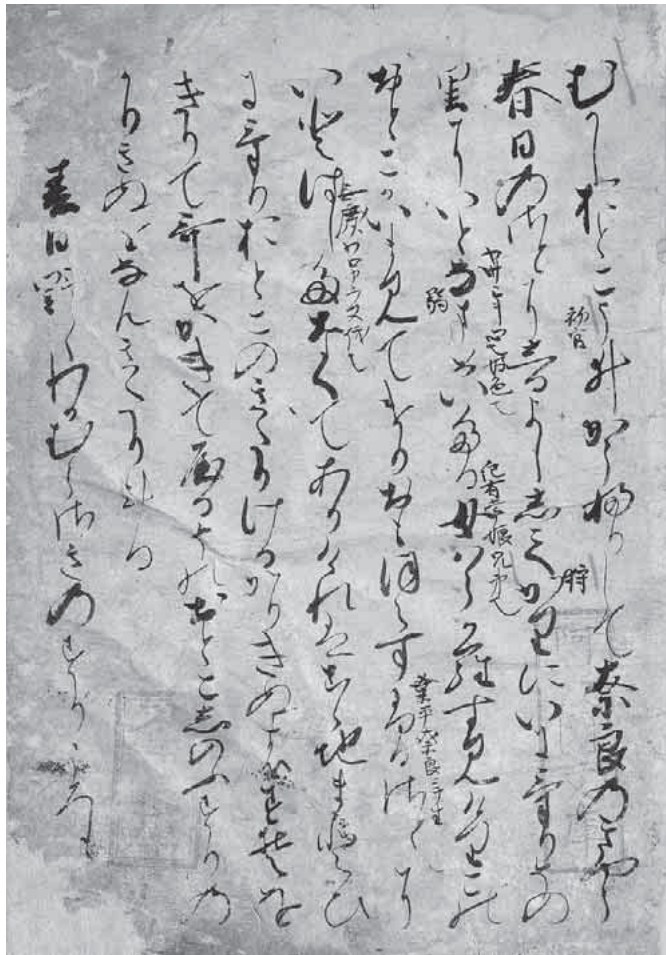
正徹(一三八一―一四五九)の永享五年(一四三三)の奥書を有する『伊勢物語』の写本である。ただし、この奥書は写しであるため、実際の書写年代はやや下ると考えられる。行間には、漢字片仮名交じりで注釈が書き入れられており、この書き入れは本文と同筆かと思われる。その注釈内容は、冷泉家流の古注と認められる。また、本文の上部に、講釈を行った日時を記したと思われる書き入れが数ヶ所に残されており、長享二年(一四八八)二月から延徳(一四八九―九二)にかけての日付が見られる。この時期に正徹は既に没しているため、正徹本を使用しながら講釈を行ったと解すべきである。講釈内容とそれを行った日時とははっきりと分かる点が、本書の特徴と言える。図録5。(松本)

〔九八一―一七〕
〔室町中期〕写
二・一・八×一五・〇 種列帖装一帖



室町時代中期に活躍した武将・歌人である、東常縁(一四〇一―?)の書写による『伊勢物語』の写本である。常縁の真跡と認められる。本文の行間には墨と朱の書き入れが見られ、両者とも本文と同筆と思われる。墨の書き入れは、『十卷本伊勢物語抄』に同様の注記が見られることから、冷泉家流の古注であると推察される。朱の書き入れは、『古筆学大成』等に収められている伝東常縁筆『伊勢物語聞書』と内容を同一にすることから、常縁周辺に存在していた注釈書であると考えられる。常縁が『伊勢物語』を理解する際に、どのような資料を用いていたのかを窺い知ることが出来る資料と言える。図録5。(松本)

「九八一四二」
 文明十八年（一四八六）写
 二二・九×一六・四種袋綴一冊

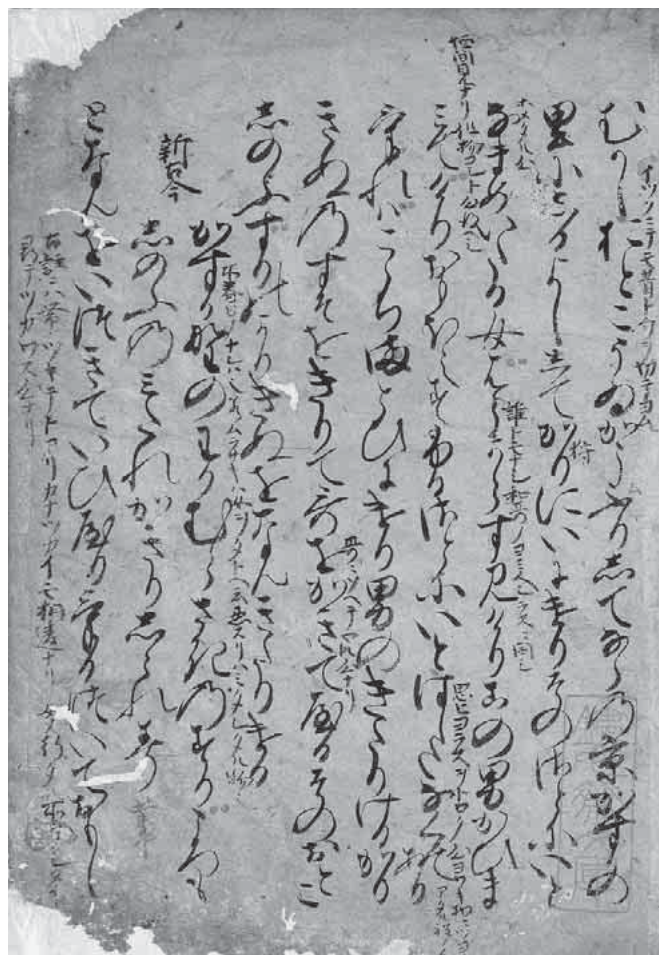


この本には清濁などの読み方を示す声点が朱や墨丸点をもって入れられている。また仮名で書かれた本文に対して漢字を当てて意味を明示したり、初段「女はらから」に「紀有常娘兄弟也」、二段「にしの京に女ありけり」や三段「けさうしける女のもとに」に「二条后」を当てて人物を特定するなどの冷泉家流古注が行間に書き入れられている。巻末には定家自筆本をもって校合したという永享十一年（一四三九）八月六日の良将の奥書と、冷泉政為の本を書写したという文明十八年（一四八六）八月の唯心（生没年未詳）の奥書がある。

34に同じく「不忍文庫」「阿波国文庫」の旧蔵本。図録5。

（加藤）

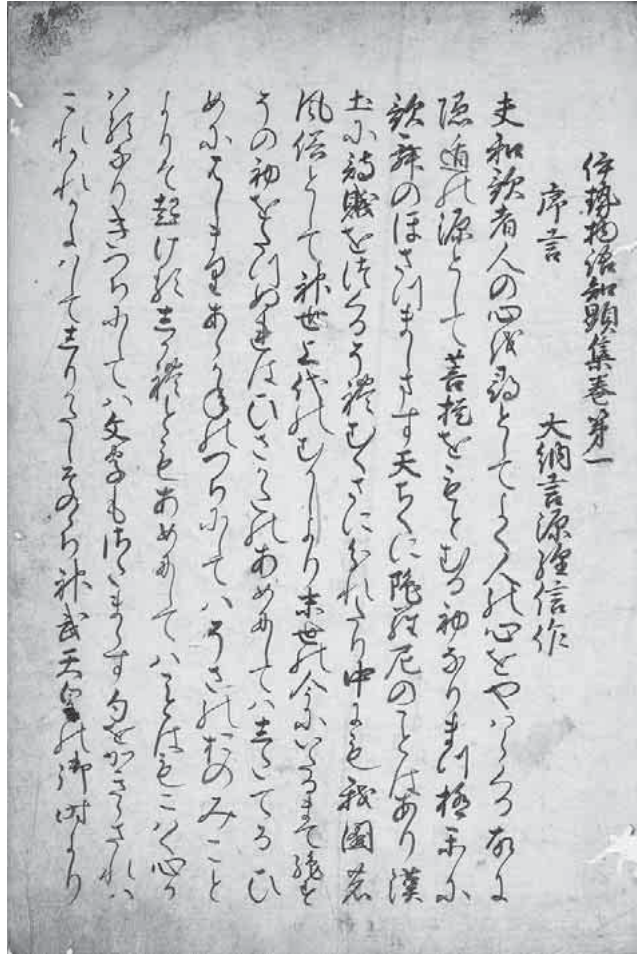
「九八一六〇」
 享祿四年（一五三二）写
 二四・七×一八・三種袋綴一冊



享祿四年八月上旬に書写された『伊勢物語』の写本である。奥書は存しているものの、署名が付されていないため、書写した人物は不明である。行間には墨の細字で注記が書き入れられている。漢字片仮名交じりの注釈で、全体にわたりにかなりの分量が書き込まれている。また、朱によって声点や読み方を示す箇所も見られる。これらの書き入れ注は本文とは別筆であり、本文の書写からしばらく経た時期に加えられたものと考えられる。書き入れ注の内容は、冷泉家流の古注に依拠したものと目されるが、完全に一致するわけではなく、今後の更なる検討が期待される。図録5。

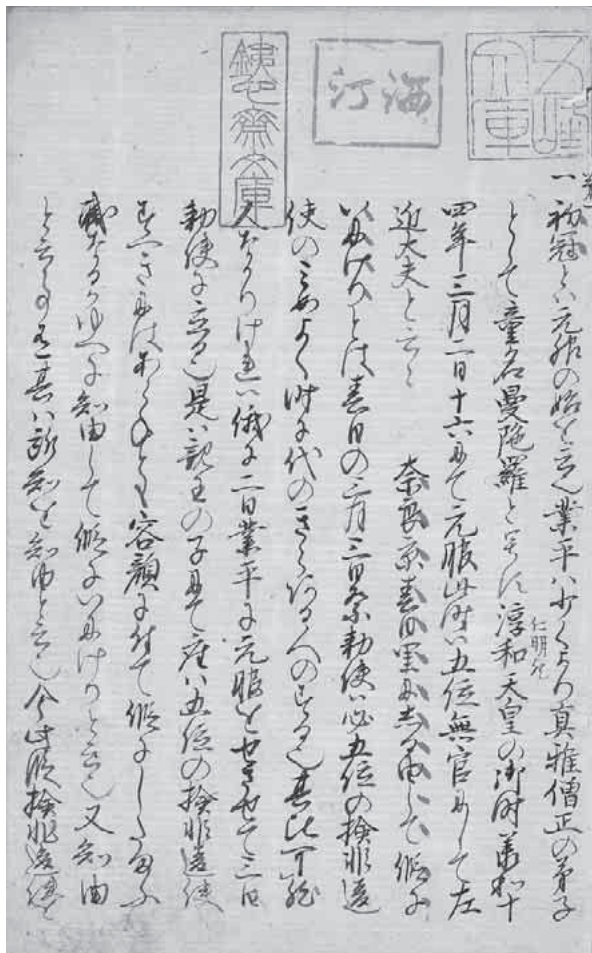
（松本）

「九八一八三二」
寛永六年（一六二九）写
二七・四×二〇・〇 種袋綴二冊



『伊勢物語』の注釈書。著者を平安時代の才人源経信（一〇一六〜九七）と記すが仮託と目される。鎌倉時代成立か。本文では、主人公と住吉神社参詣の折に出現した謎の老人との問答を通じ、伊勢物語の登場人物の名前や出来事の日時などが明かされていく。松平文庫本・続群書類従本・九州大学附属図書館本等と同じ本文の特徴を有するが（松平文庫本系統）、これらはいずれも近世に書写された資料であり、その中において本書の持つ書写奥書（寛永六年五月）が現在確認しうるもっとも早い時期のものである。図録Ⅳ・叢刊9・大成2。
（藤島）

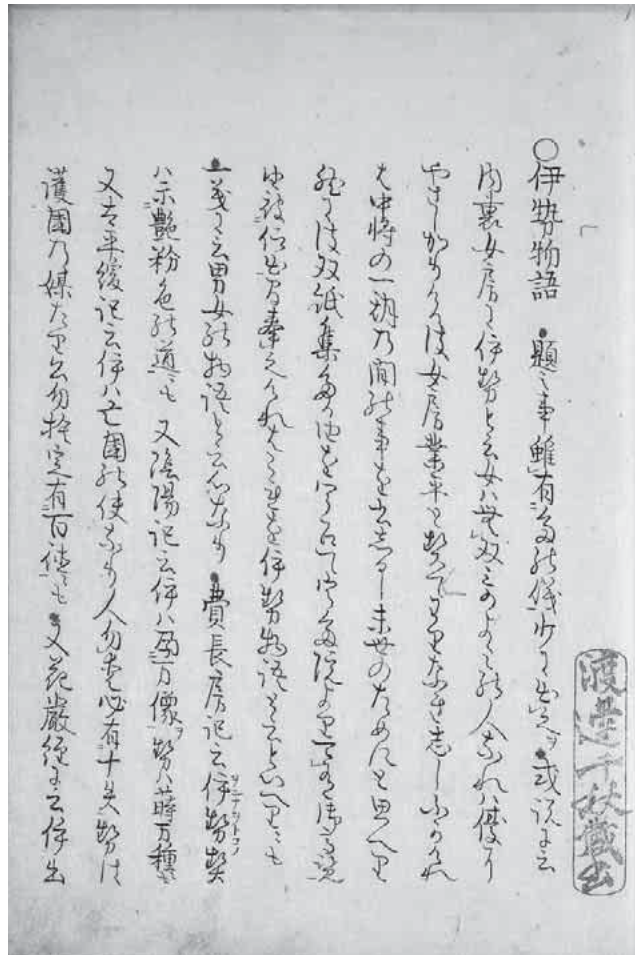
「九八一七二四」
〔江戸中期〕写
二七・〇×一八・二 種袋綴一冊



原題は「伊勢物語抄」。冷泉家流古注の一種。巻末に冷泉為秀（？）一三三七二）など三人の奥書を持ち、藤原為家（一一九八〜一二七五）自筆本を今川了俊（一二三二六〜一四二〇）に与えたと伝えるが疑わしい。本体の注は『十卷本伊勢物語註』に近いが、和歌の注を「歌無義」と簡略にするなど相違もある。その後には「追異説」「追考人」などとして『彰考館文庫本伊勢物語抄』に近い注を増補する。第七十七段以降しか現存しない『彰考館文庫本伊勢物語抄』系統の注の全容を知り得る貴重な資料だが、別に「口伝」も追記されており峻別が必要である。「五峰文庫」「洒汀」印。図録Ⅱ・叢刊1・大成1。（青木）

伊勢物語奥秘書

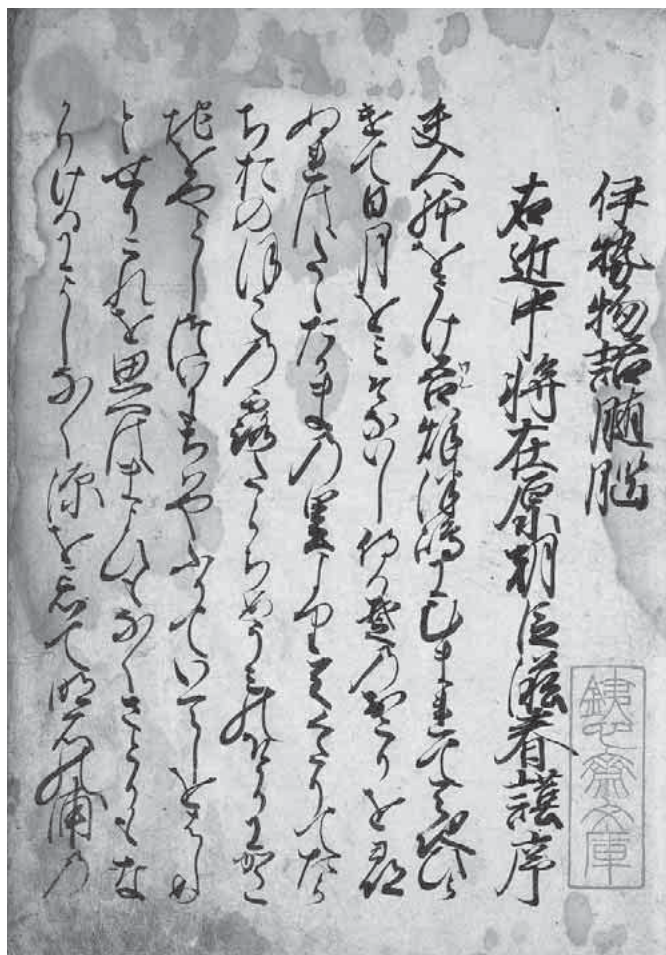
「九八一七三〇」
〔江戸中期〕写
二六・八×一八・四 糧袋綴 五冊



『伊勢物語』の注釈書であり、鉄心斎文庫に所蔵されているものが唯一の伝本である。書写者は、江戸時代中期の国学者・伴蒿蹊（一七三三〜一八〇六）であるが、注釈書そのものは室町後期には既に成立していたと目される。室町期に流布していた複数の注釈書ととりまとめた注釈となっている。冷泉家流伊勢物語古注を中心としつつも、新注をも含む点が目される。また、注釈の中には、東常縁の手を経た注釈が引用されている痕跡が見える。常縁周辺に存在していた注釈書は、現在は古筆切がわずかに残るばかりであり、その実態は不明である。未解明の部分の多い、常縁周辺の注釈書の様相を浮かび上がらせる可能性を秘める点で、非常に貴重な資料と位置付けられる。渡辺千秋旧蔵。図録11・叢刊2・大成1。（松本）

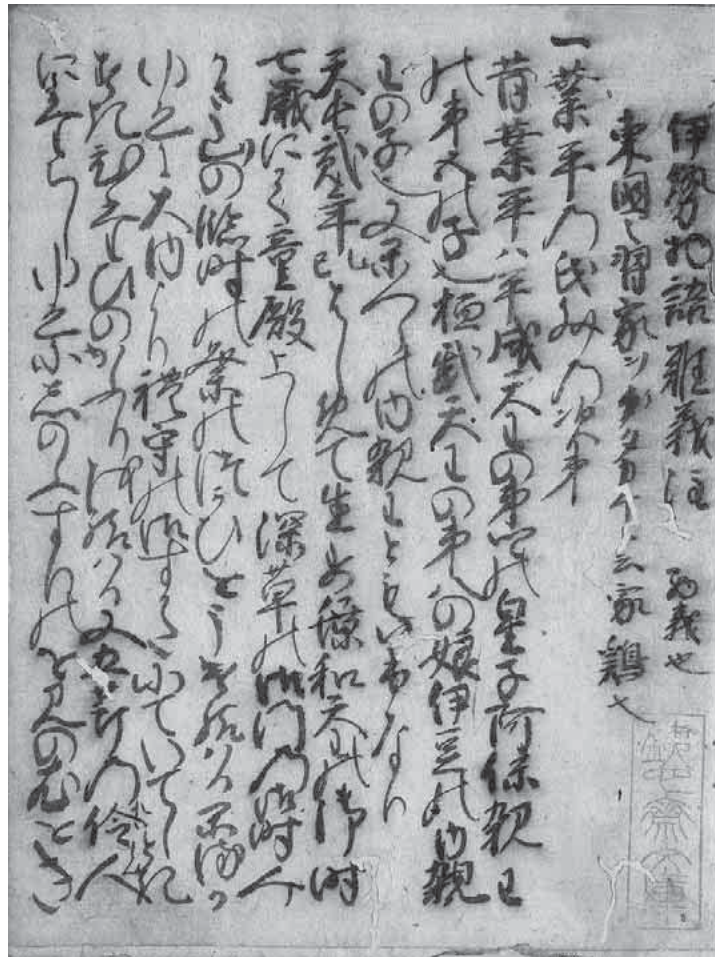
伊勢物語髓脳

「九八一七三八」
〔室町末期〕写
二四・〇×一八・〇 糧袋綴 一冊



『伊勢物語』の主人公である在原業平の子・滋春に仮託された秘伝書。おもてには記されざる『伊勢物語』の深意を説くという立場で記されている。例えば「伊勢」の二文字を「伊は胎蔵、勢男は金剛也、伊は**阿**（ア）、勢は**婆**（パン）也」など密教の教理に引き付けて説明し、また、『伊勢物語』を男女の和合を説く物語として解釈するなど、平安時代末から鎌倉時代にかけて広まった立川流と称される真言宗の一派の教義理解の上に成り立っている。巻末には「弘安五年（一二二二）十二月十日」の年紀が見えるが、この弘安年間（一二七八〜一七八七）には、やはり和歌の奥に隠された物語を説く『古今和歌集』の注釈書なども成立している。図録11。（海野）

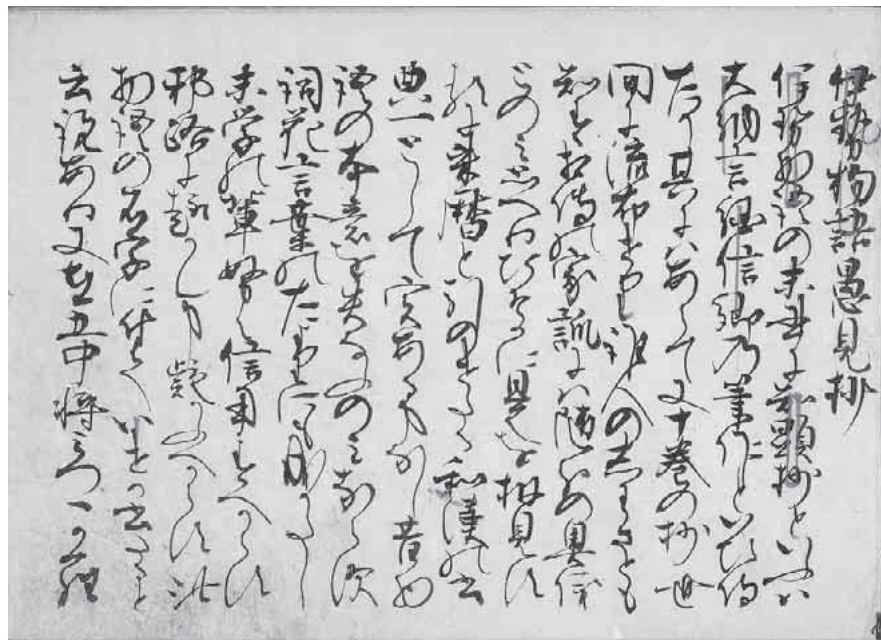
〔九八一七四四〕
〔室町中期〕写
二四・五×一九・五種袋綴一冊



「伊勢物語」の難語に関して一つ書きで注釈を施した古注の一種。十一丁裏に別筆細字で新古今集等の八首の和歌が書かれる。諸本としては冷泉家時雨亭文庫本・宮内庁書陵部本・山本登朗蔵本と天理図書館本・東海大学桃園文庫本の二系統に分けられるが、本書は後者に属する。さらに天理本等に比して注釈の項目数が半分以下しか有しないが、他本が冒頭の「業平の氏文の次第」に次いで置く「業平同時代の人々」と「同時代の女房」を末尾に置く配列から、欠本ではなく、短期伝授の秘伝書としてまとめられたとの山本登朗の指摘がある。叢刊9。

(小林)

〔九八一七二二〕
〔江戸初期〕写
一五・二×二一・四種折紙列帖装一帖

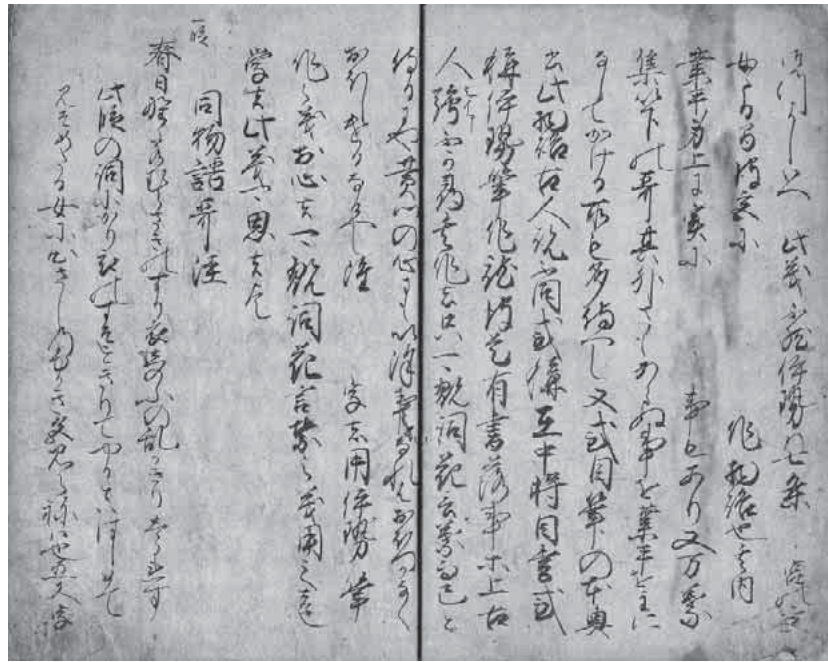


一条兼良による『伊勢物語愚見抄』は、古注を批判したもので、同書から、『伊勢物語』注釈は旧注の時代へと入った。『伊勢物語愚見抄』には、大きく分けて長祿四年(一四六〇)成立の初稿本と、文明六年(一四七四)成立の再稿本がある。初稿本の伝本は少なく、田中宗作『伊勢物語研究史の研究』(桜楓社、一九六五年)に翻刻が収められる斑山文庫(高野辰之)旧蔵田中宗作蔵本によって研究が進められてきた。本書は前半のみであるが、朱筆による書き入れや傍記があり、丁寧な姿勢で書写されている。斑山文庫旧蔵本の誤脱を訂正できる箇所も多い。図録11・叢刊9。

(小山)

伊勢物語山口記

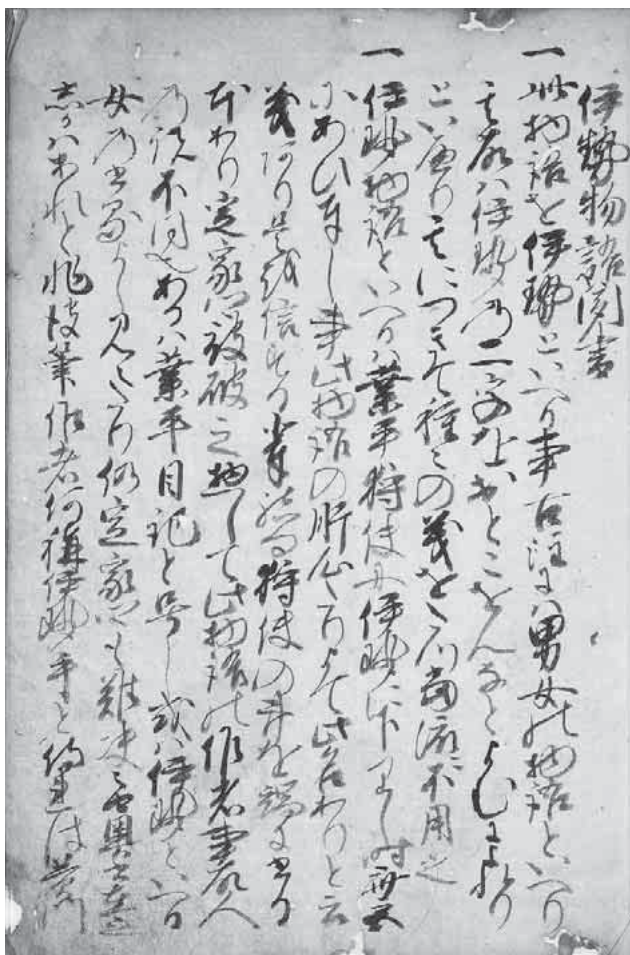
「九八一七六六」
天文一八年（一五四九）写
二三・〇×一五・九種袋綴一冊



室町時代に活躍した連歌師の宗祇（一四二一〜一五〇二）によって、延徳年間（一四八九〜九二）に作成された『伊勢物語』の注釈書である。本書に付された宗祇自身の奥書によると、周防国（現在の山口県）滞在中に、初学者を対象として編まれたことが述べられている。宗祇に関連する『伊勢物語』の注釈書は数多く存在するが、宗祇自身の手によって記された注釈書は本書のみである。現在までに確認された『伊勢物語山口記』の写本は、七本しかない。鉄心斎文庫には二本が収められており、本書は天文十八年の奥書を持つ。他の伝本と比較すると、後人による増補も見られるものの、他本に共通する欠脱部分を補う性格をも有する。図録11・叢刊3・大成3。（松本）

伊勢物語肖聞抄

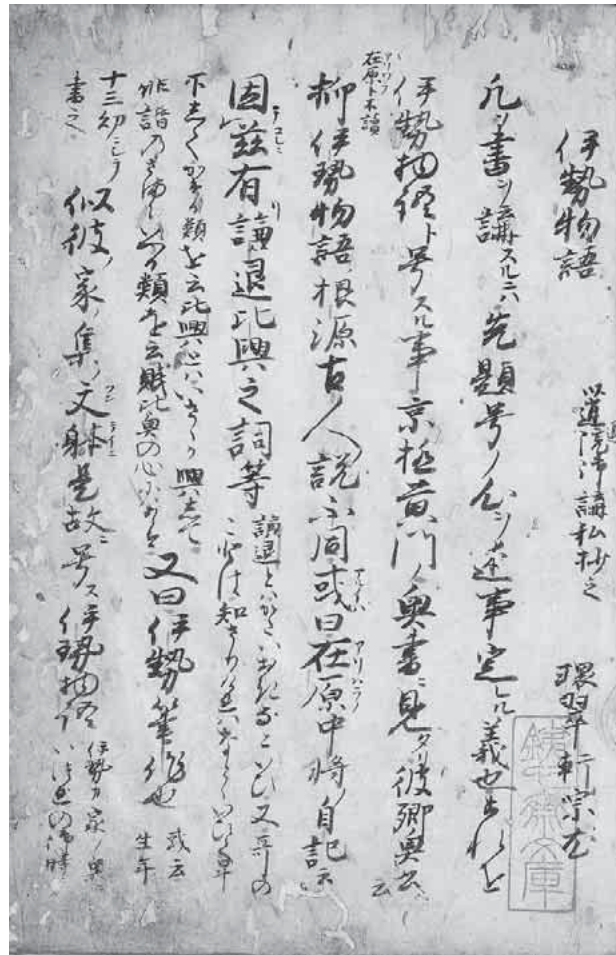
「九八一七二七」
〔室町後期〕写
二七・〇×一九・五種袋綴一冊



『伊勢物語肖聞抄』は室町時代の連歌師宗祇（一四二一〜一五〇二）の『伊勢物語』講釈を、弟子の肖柏（一四四三〜一五二七）が聞き書きしたものである。外題には「伊勢物語聞書 左馬頭政氏筆 肖聞抄」とあり、巻末には永正六年（一五〇九）の「夢庵老」（肖柏）の書写奥書および「左馬頭政氏」の署名と花押がある。「政氏」は古河公方足利政氏（一四六六〜一五三二）のことで、猪苗代兼載（一四五二〜一五一〇）らとも交流があった。文明九年（一四七七）本、文明十二年（一四八〇）本、延徳三年（一四九二）本の三種が知られるが、七十五段の注釈にある「すでに今年文明十二庚子にいたりて六百一年也」という一文から、本書は文明十二年本の系統に属することがわかる。図録11。（田村）

伊勢物語惟清抄 聖碩加注

〔九八一七四五〕
〔江戸中期〕写
二七・二×一九・九種袋綴一冊

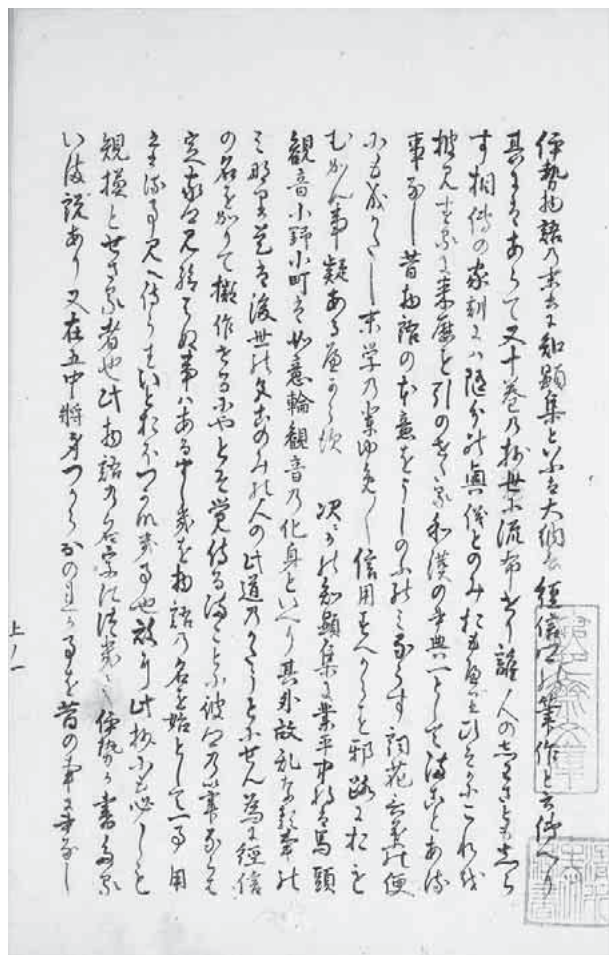


古典書写とその研究に業績のあった三条西実隆の『伊勢物語』研究は、いくつか残された講釈の聞書によつてのみ知ることができ、大永二年（一五二二）五月の講釈を儒学者の清原宣賢（一四七五～一五五〇）が筆記した『惟清抄』は、現在知られる実隆講釈の聞書のなかで最も整い、唯一、伝授の証明としての実隆の奥書を有する。宣賢は、大永二年、天文六年（一五三七）、天文十七年の三度『惟清抄』を書写したが、本書は宣賢自筆の天文十七年本を、寿命院聖碩が天文十九年に書写し、「私云」として自説を書き加えたもの。ただし八十二段「ヤマトウタ」の「私云」は天文十七年本『惟清抄』に元来存する宣賢の注。図録11。

（青木）

称談集解

〔九八一七六五〕
〔江戸後期〕写
二八・五×一九・九種袋綴二冊

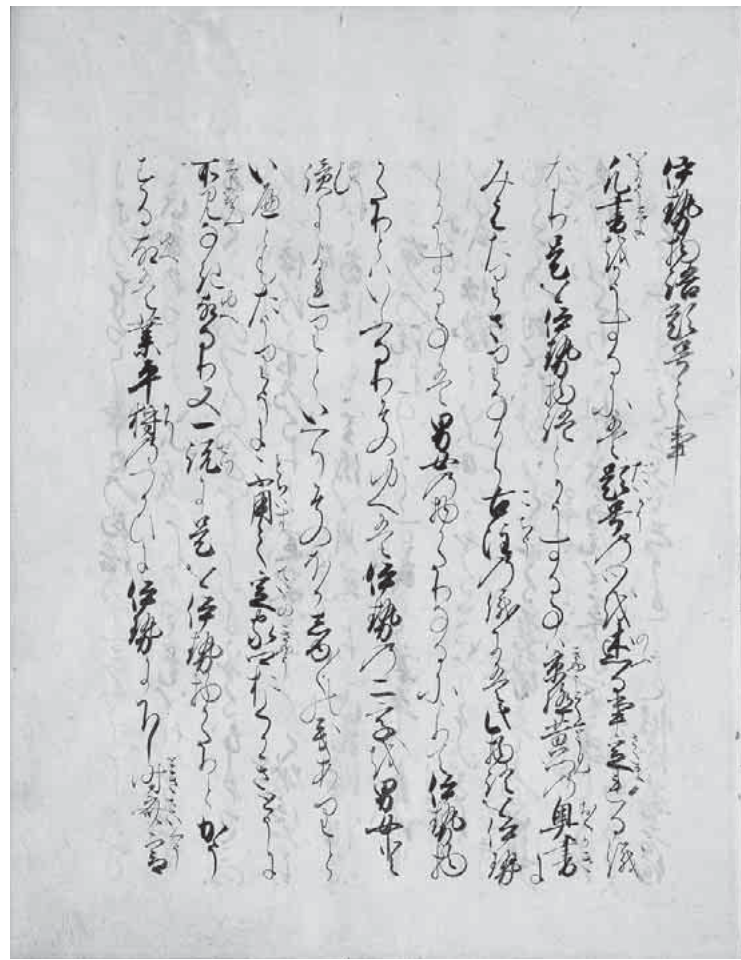


『伊勢物語』の注釈書。一条兼良の注釈書『伊勢物語愚見抄』をもとに、三条西公条の伊勢物語講釈の聞書を加え、公条の二男である水無瀬兼成がまとめたもの。書名の「称談」は、称名院（公条の法号）の講談の意。公条の講釈内容を直接知ることのできる数少ない書の一つである。兼成の記した慶長五年の奥書によれば、もともとの成立は三十年以上前に遡る。本書はそれを整理しながらまとめ直したものである。現存する伝本はきわめて少ない。なお、本書は、兼成の奥書のあとに寛文六年（一六六六）と寛政九年（一七九七）の書写奥書がある。図録11・叢刊11。

（本廣）

えいかんの書

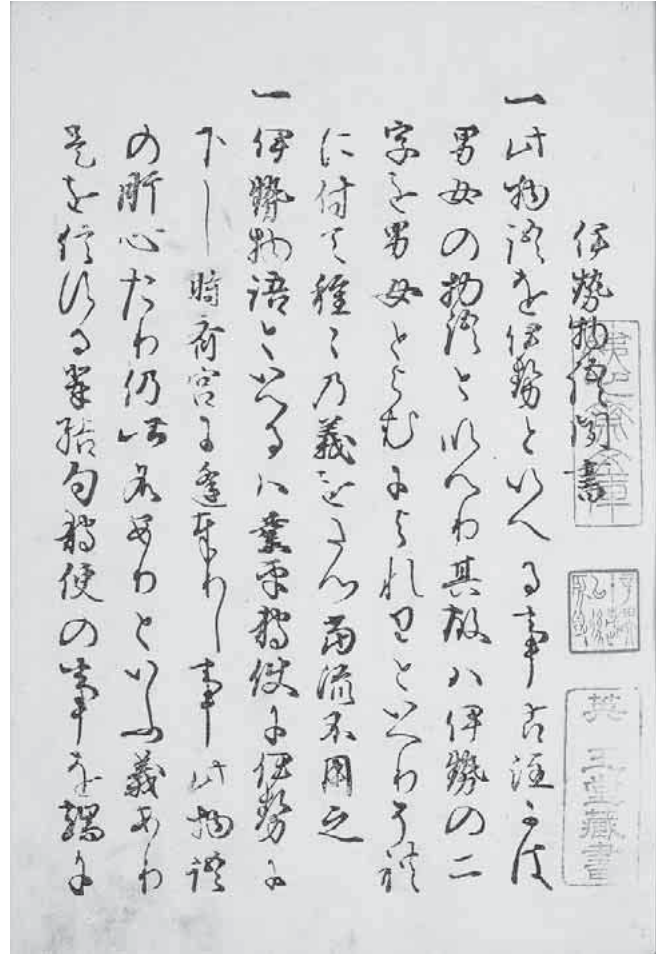
〔九八一八一〕
〔江戸期〕写
二・八・四×二一・六種 列帖装二帖



大型の美麗な冊子、文中の漢字の大部分に振り仮名が振られているなど、『伊勢物語』注釈書として異例の形態を有する。巻末に、宗養所持本を書写したことを伝える天正十年の無記名奥書があり、本書はその転写本か再転写本と思われる。注釈の内容は、『愚見抄』の引用が見られる他、『三条西大』『西大』として三条西公条の説が多く引かれており、三条西家の『伊勢物語』研究を伝える書の一つである（『三条西大』『西大』の「大」は大納言か大臣の略）。なお、書名に「えいかんの書」とあり、三条西家との関わりがあることから、本書の著者は、源氏物語注釈書『万水一露』をあらわした連歌師の能登永閑かと推定されている（山本登朗）。図録11・叢刊10。（本廣）

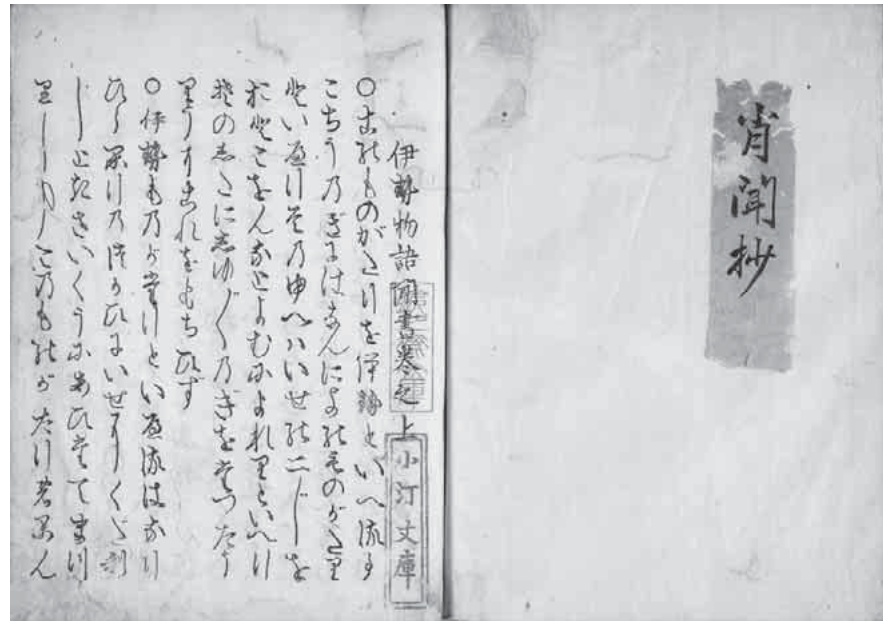
伊勢物語肖聞抄

〔九八一九一八〕
慶長一四年（二六〇九）刊
二・五・八×一八・九種 袋綴 大本三冊



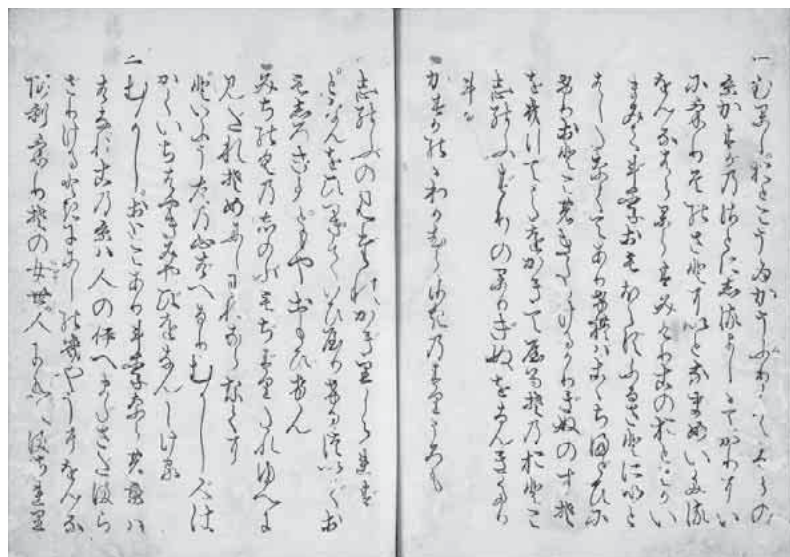
『伊勢物語』の注釈書の一つである『伊勢物語肖聞抄』の文明九（一四七七）年本を慶長十四年に嵯峨本（古活字版）として刊行した豪華本。刊記に「也足叟」とある後の署名「素然」は中院通勝によるもの。冒頭に「英王堂蔵書」の蔵書印がある。「英王堂」は明治・大正期に活躍したイギリス人日本研究者で、『日本事物誌』などでも知られるバジル・ホール・チェンバレン（一八五〇〜一九三五）。『天理図書館善本叢書』の月報八（一九七三年一月）所載の芦澤新二「伊勢狂い」にも、「注釈（版）本のめほしいところでは、英王堂（チェンバレン）旧蔵の「肖聞抄」が光り、嵯峨本中でもいさゝか自慢にできそうである」と記される。図録9。（田村）

〔九八一—九二四〕
〔慶長頃〕刊
二六・八×二〇・六 糧袋綴 大本二冊



『伊勢物語首聞抄』の文明十二（一四八〇）年本を木活字もっかじを用いて刊行した本。刊年不明。**55**に比べて仮名表記が目立ち、元は漢文の奥書も仮名に開いている。古本書の活字は、**57**の古活字版『伊勢物語』と同じものであることが指摘され、芦澤も帙の表にその旨を注記している。本文に用いられた癖のある活字のほか、章段番号の付し方やその活字も酷似し、川瀬一馬によれば、印刷面の磨滅状況の比較から本書の活字を無刊記無挿絵本が襲用したと見られるという。章段番号は先行する嵯峨本『伊勢物語』には見られず、その点からも無刊記無挿絵本が本書の形式に倣った可能性が考えられよう。小汀利得旧蔵。図録9。（田村）

〔九八一—五七二〕
〔慶長中〕刊（無刊記）
二六・三×二〇・五 糧袋綴 大本一冊



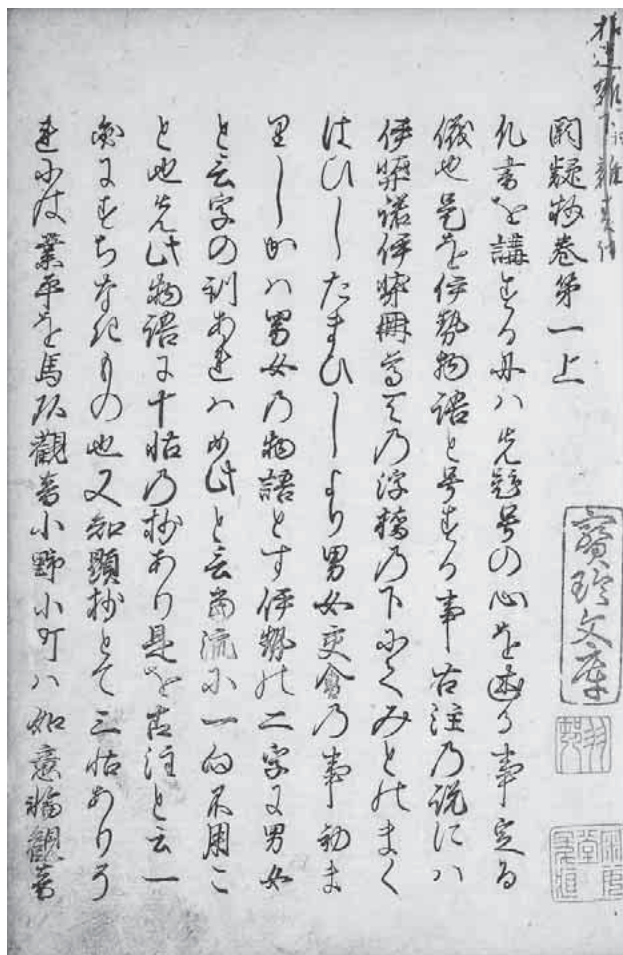
古拙の風趣を纏った、比較的大ぶりの木活字による古活字版（無刊記）。一面十一行の絵ナシ本で、巻末に業平伝を付刻する。孤本。緞子装どんすそうの拵こしらえ帙入り。森銃三もりせうぞうによる書き題簽「伊勢物語（慶長中刊古活字版／極稀 孤本）」の下部に、「活字本首聞抄と同活字本なり」と後書される（芦澤新二筆）。川瀬一馬によれば、**56**の『伊勢物語首聞抄』（慶長中）刊の古活字版。これも稀本）と同じ木活字を使用して刊行されたという。絵ナシ古活字版（川瀬分類では「嵯峨本第五種本」、高木浩明分類では「無刊記無挿絵乙種本」としての〈意味〉の検証も大切な問題である。小津桂窓・安田善次郎旧蔵。『弘文莊待賈古書目』四十二号（一九七二）掲載（69番）。『伊勢物語版本集成』に影印を収載。（神作）

〔九八―五七三〕
〔元和寛永中〕刊（無刊記）
二八・三×二〇・二種袋綴 大本一冊（存卷上）



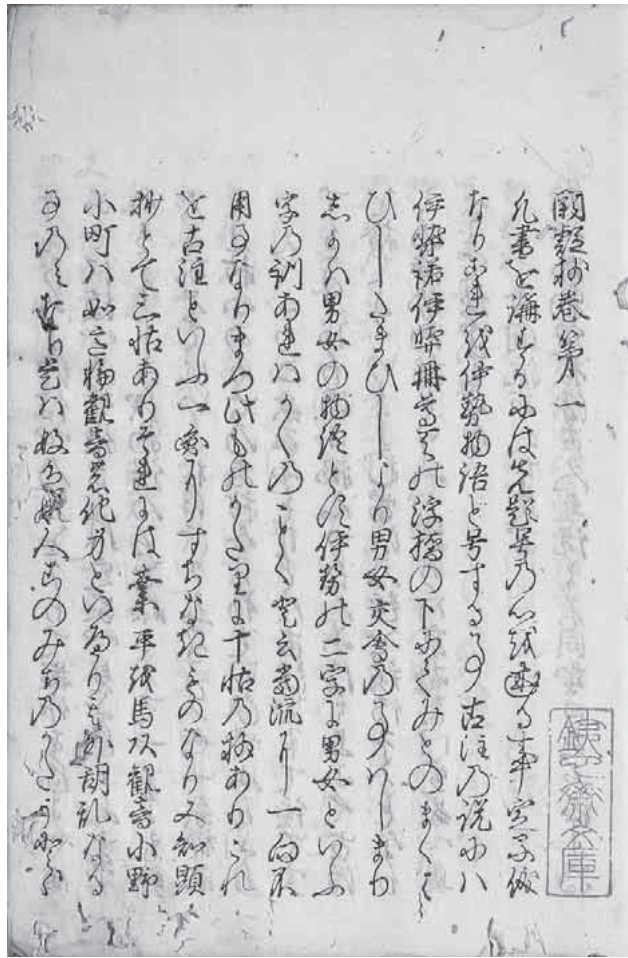
一面十二行の絵入り本（二十五図）。巻下を欠くものの、本書のほかに伝存が知られず、従来知られている古活字版とは異版か。無刊記ながら、その版相（はんそう）につけば慶長よりも下った元和寛永中の刊行と推定され、栗皮の原裝表紙（げだ）（外題欠）を持つこともそれを裏付けよう。映入り。森銚三による書き題簽「伊勢物語 卷上（元和寛永中刊古活字版／極稀本）」を有する。『弘文荘待賈古書目』四十二号（一九七二）掲載（209番）。（神作）

〔九八―九二〇〕
〔慶長頃〕刊
二七・九×一九・三種袋綴 大本五冊



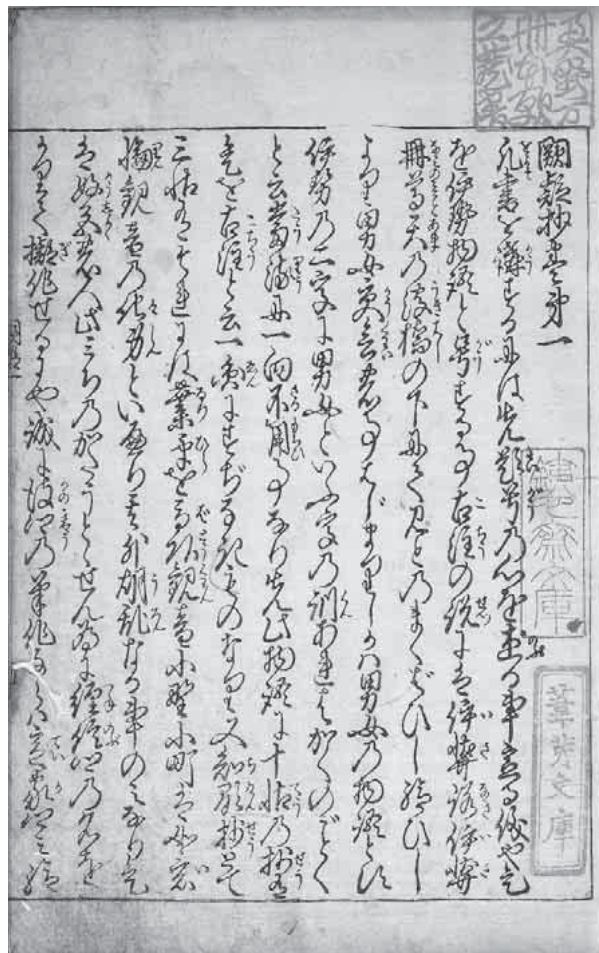
細川幽斎の『伊勢物語』注釈書。幽斎が八条宮智仁親王（とじむ）に講釈をするために作った草稿を基とし、より幅広い読者を想定して再編集したもの。草稿本から中書本、清書本を経て完成した『闕疑抄』は、おそらくは幽斎存命中に古活字本として出版された。内容は、三条西実枝による講釈の聞書と、『惟清抄』（三条西実隆の講釈を清原宣賢が筆録したもの）を中心とするが、『惟清抄』は再編集時に多く組み込まれた（以上、山本登朗）。他に、『愚見抄』、『肖聞抄』、『三条西家の諸説も見られる。本書は古活字版の中でも最も古いもの。〔御幸町通二条 仁右衛門 活版之〕と版元の記載あり。朱墨の書き入れが多く見られる。宝玲文庫旧蔵。図録9。（本廣）

〔九八—九三二〕
〔慶長頃〕刊
二八・四×二〇・二 種袋綴 大本五冊



59と同じ『闕疑抄』の古活字本だが、こちらは一面に十二行を印刷する別版。細川幽齋は、和歌を三条西実枝に学び、古今伝受を受けて二条派の正統な歌学を後世に伝え、古典学にも通じた。その幽齋の注釈書である『闕疑抄』は広く読まれ、写本のみならず、版本も数多く作られた。古活字十二行本は古活字十行本が版行されてほどなくして作られたと考えられている。無刊記。その活字の違いから三種類の古活字十二行本が存在する。(本廣)

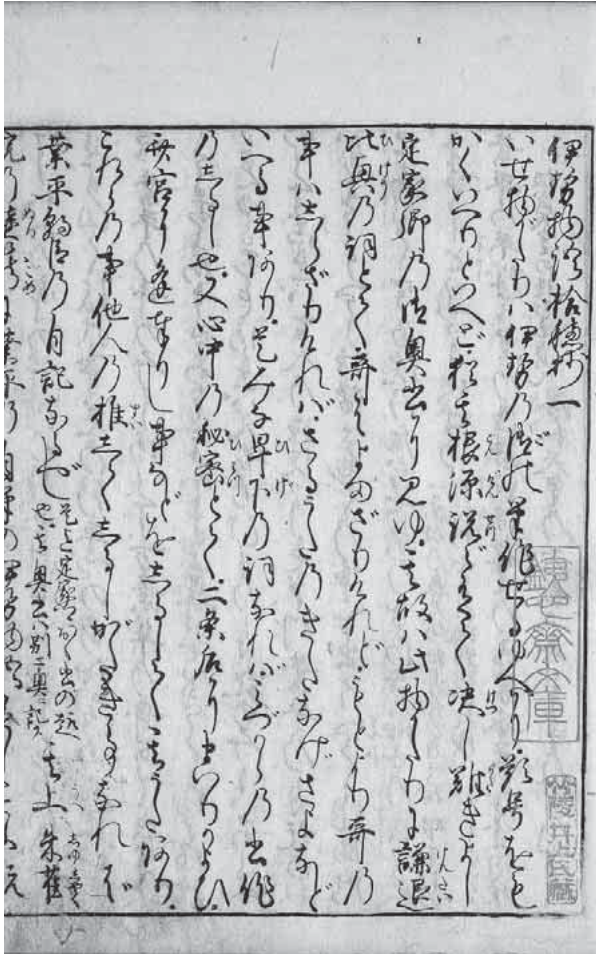
〔九八—九三九〕
寛永十九年(二六四二)刊
二八・〇×一八・七 種袋綴 大本二冊



寛永十九年の刊記を持つ整版本。『闕疑抄』は、古活字版版行の後、整版本が何度も刊行された。本書は、無刊記本、寛永十一年本に続いて版行された本。後に出版された『闕疑抄』の多くはこの寛永十九年本の後刷りである。版元は「二條通観音町 風月宗智」。奥野彦六旧蔵。大成5。(本廣)

伊勢物語拾穂抄

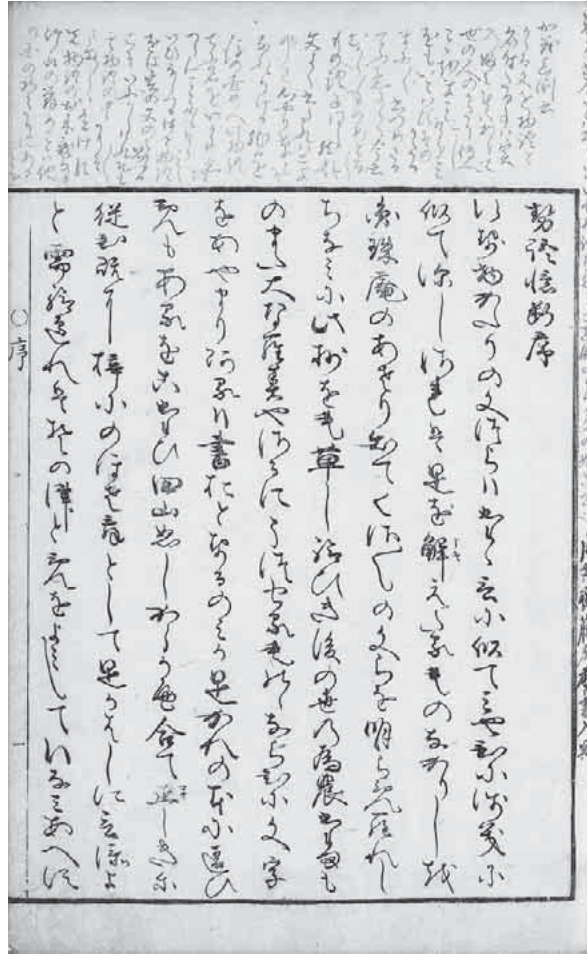
〔九八―八八〇〕
〔延宝頃〕刊
二七・一×一九・四種袋綴 大本五冊



江戸幕府に歌学方として仕え、古典学者・歌人・俳人であった北村季吟(二六二四―一七〇五)の『伊勢物語』注釈書。『伊勢物語愚見抄』(49)から『伊勢物語闕疑抄』(59―61)に至る室町時代の注釈を集成し、師・松永貞徳(一五七一―一六五三)の説や自説を加えたもの。『闕疑抄』とともに広く流布し、形態的にも頭注・傍注形式による注釈は画期的であった。刊記のあるものでは延宝八年(一六八〇)八月の版が古いが、本書はそれに先立つと考えられる無刊記五冊本。なお季吟は、寛文三年(一六六三)、師説を中心にまとめて後水尾上皇に献上している。図録9。(青木)

勢話臆断

〔九八―八八二〕
享和三年(一八〇三)刊
二六・四×一八・二種袋綴 大本五冊

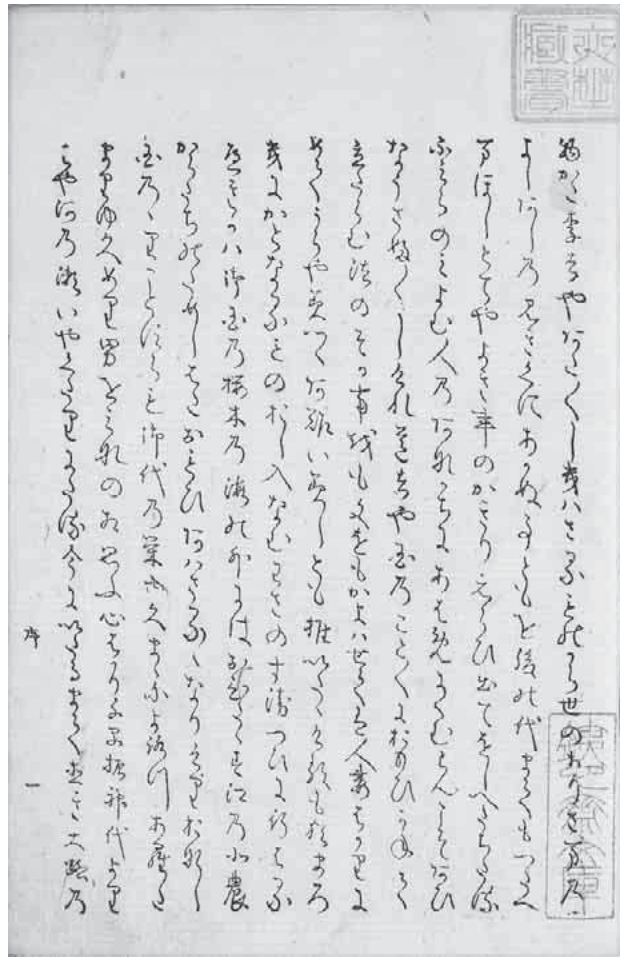


江戸前期の大坂の和学者契沖(二六四〇―一七〇二)の遺著を、小沢蘆庵(二七三三―一八〇二)門の歌人田山敬儀(二七六六―一八一四)が校訂の上、刊行したもので、『伊勢物語』注釈史上では新注の嚆矢と位置付けられている注釈書。十八世紀後半以降、伴蒿蹊や小沢蘆庵ら上方の歌人たちの間で契沖評価が高揚し、本書をはじめ『勝地吐懐編』『河社』などの契沖の著述が相次いで上梓された。掲出本には朱筆にて夥しい書人が施されているが、その大半は賀茂真淵『伊勢物語古意』の所説を移写したものである。また、ごく近年の墨筆書人も備わり、「□案斎藤彦磨書入歟」などとあるものの信じ難い。図録9。(二戸)

伊勢物語古意

本居春庭書入本

〔九八―八八九〕
〔寛政五年（一七九三）〕刊
二六・〇×一八・六 糧袋綴 大本六冊

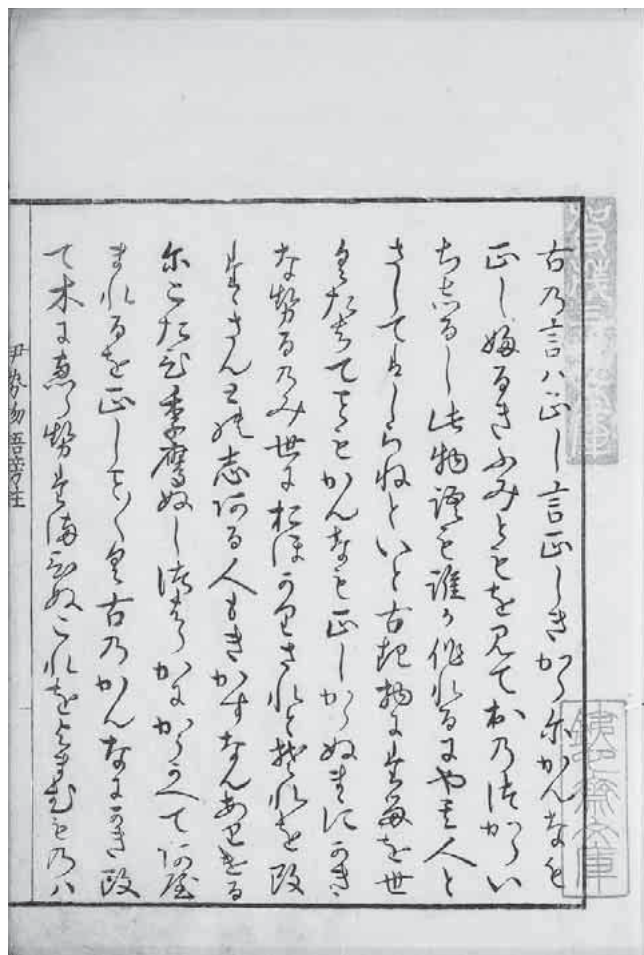


江戸中期の和学者賀茂真淵（一六九七―一七六九）の注釈書で、師である荷田春満の『伊勢物語童子問』の説を踏まえつつ、本文解釈にあたって真名本を積極的に採用している点に特色がある。真淵の高弟加藤宇万伎の門人であった上田秋成が自身の伊勢物語論『よしやあしや』を附して大坂の書肆より出版し、広く流布した。掲出本は『よしやあしや』を欠くが、巻末に本居宣長の息子春庭（一七六三―一八二八）の寛政八年春の識語があり、随処に「本居云」等と冠した朱筆書入が見られる。その内容は『玉勝間』巻五に見える宣長説と同趣旨異文で、恐らく在京中の春庭が同書の稿本に基づいて宣長説の整理を試みたものであろう。岸本由豆流・交野時万旧蔵。図録9。（一戸）

伊勢物語傍注

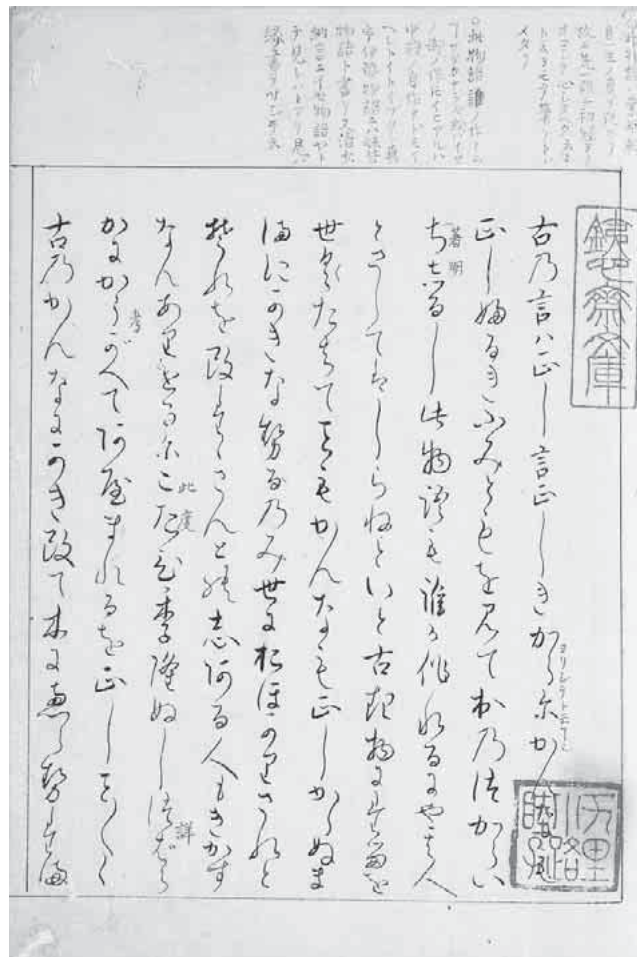
賀茂季鷹書入本

〔九八―八九三〕
安永五年（一七七六）刊
二七・〇×一九・六 糧袋綴 大本二冊



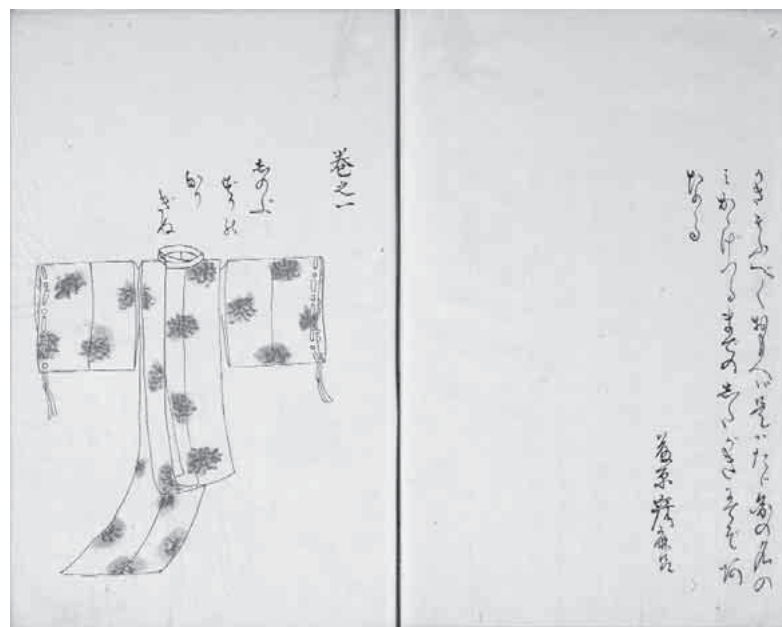
著者の賀茂季鷹（一七五四―一八四一）は上賀茂社社家に生まれ、当初は有栖川宮家諸大夫だったが明和九年（一七七二）に職を辞して江戸に下って荷田御風の門弟となり、帰洛後は上賀茂社祀官として社に仕える一方、京洛文壇内での重鎮として活躍した人物。本書は彼が江戸滞在中に刊行したもので、若干の傍注を施し、更に本文を契沖仮名遣いに拠って校訂している点に特色がある。掲出本は巻末賀茂別雷社の三手文庫に季鷹が奉納した旨の識語を有し、同文庫の印も捺されている。ただし明らかな後印本で、上冊に季鷹筆で若干の補注及び塗籠本に拠った本文の訂正書入れがあることから、恐らく文政年間頃に季鷹が補訂を加えた上で奉納したものであろう。図録9。（二戸）

〔九八―七九六〕
寛政四年（二七九二）写
二六・六×一九・五 種袋綴一冊



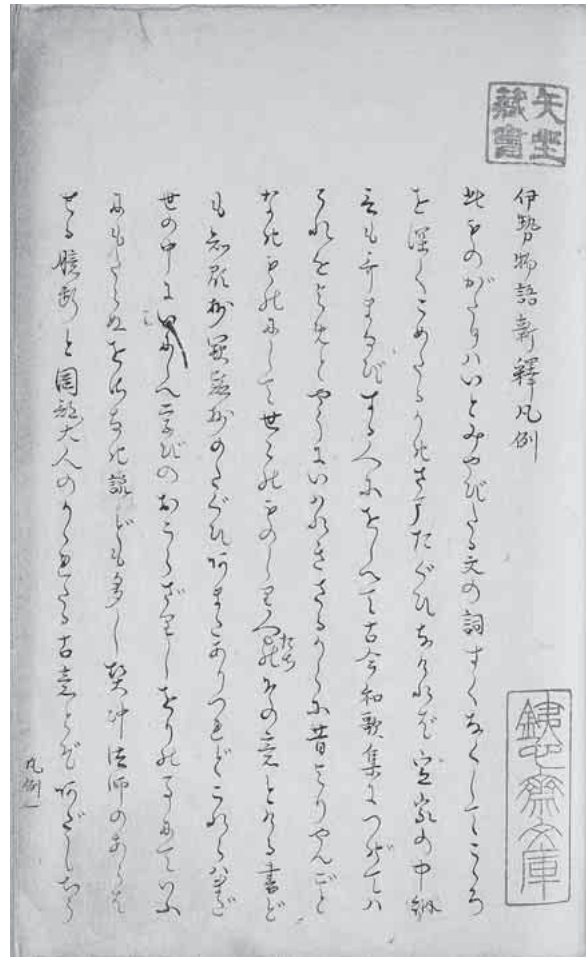
安永五年（一七七六）刊の賀茂季鷹著『伊勢物語傍注』の版本を模写したものの。寛政四年無署名奥書あり。朱筆・藍筆等で諸家の説が夥しく頭書・傍記されているが、^{なげ}建部綾足『伊勢物語古意追考』や清水浜臣^{しみずはまおみ}『伊勢物語添註』等現在では稀覯に属する著作が参照されており、また刊本にはない季鷹説も見える（早稲田大学図書館蔵季鷹自筆書入本と対照するに同趣旨異文）。名前が「秀鷹」と悉く誤記されており季鷹筆とは認め難いが、近世期における版本に基づく書入本作製の実態が窺われる好資料。万里小路建房六女で水戸藩主徳川^{なりあき}齊昭の側室だった万里小路陸子の蔵書印のほか、亀の上に「敦達」とある印主未詳の朱文丸印あり。図録15。 （一戸）

〔九八―七八〇〕
〔江戸後期〕写
二七・九×一九・一 種袋綴二冊



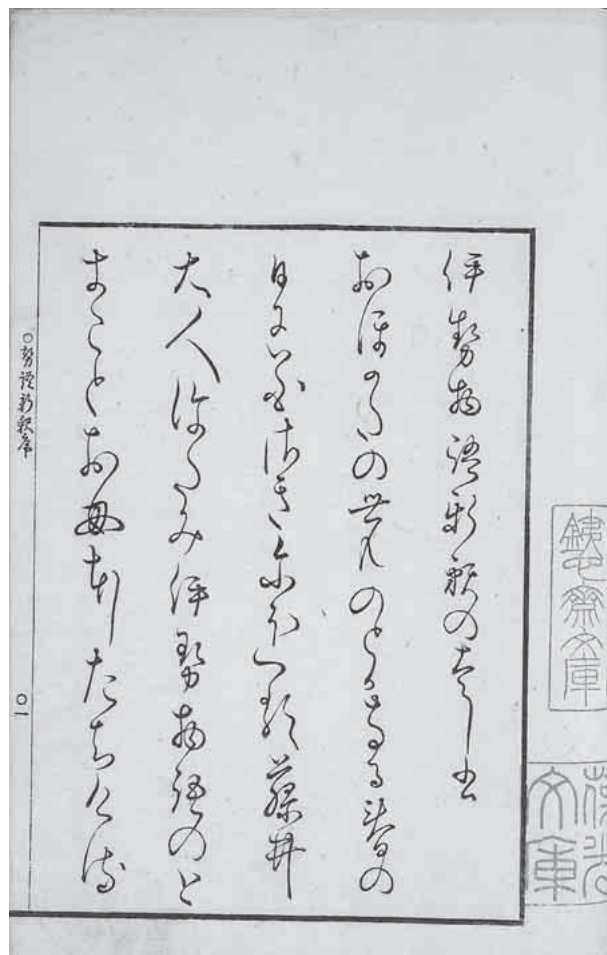
石見浜田藩士の和学者斎藤彦磨^{ひしまろ}（一七六八―一八五四）による『伊勢物語』注釈書。著者は伊勢貞丈^{さだたけ}に有職故実を、賀茂季鷹に和歌を、本居宣長に私淑しつつ本居大平に和学を学んだ人物。その書名通り、物語に登場する衣服、調度、動植物等のさまざまなモノについて、豊富な図版を示して解説する点に特色がある。掲出本には各冊表紙に「斎藤彦麻呂大人自筆」と後代の墨書があるものの認めがたい。実践女子大学図書館黒川文庫蔵の彦磨自筆本の奥書によって、享和二年（一八〇二）頃の成稿と知られる。また初段に塗籠本の本文についての言及があり、ごく部分的なものながら、塗籠本を解釈に用いた早期の事例として注意される。丁字色布目表紙。豊田長敦・同幹敦旧蔵。図録15・叢刊14。 （一戸）

〔九八一七七二〕
〔文化九年（一八二二）頃〕写
二五・一×一七・二種袋綴五冊



文政元年（一八一八）に刊行された藤井高尚（ふじいたかのあ一七六四〜一八四〇）による同名の注釈書の自筆稿本。本来六卷六冊だが、掲出本は巻第六にあたる末尾の一冊を欠く。著者は備中国賀陽郡宮内（現在の岡山市内所在）の吉備津宮に奉仕する社家に生まれ、祀官としての職務の傍ら、たびたび京や江戸をはじめ各地に遊学し、また本居宣長に入門して古学の研鑽を積んだ和学者。とくに宣長没後は同門中の重鎮として活躍し、『大祓詞後々積』『さき草』など多くの著述を遺した。掲出本は胡粉や貼紙などによる推敲跡が夥しく、実際に刊行されたものとの異同箇所も多数にのぼり、執筆時の著者の苦心の様子が窺われる。共紙表紙。井上通泰・矢野利雄旧蔵。図録15・叢刊13。（一戸）

〔九八一九〇七〕
文政元年（一八一八）刊
二五・八×一八・三種袋綴 大本六冊



備中国の和学者藤井高尚の注釈書で、その注解の詳細さから近代に至るまで長く利用され続けた。契沖『勢語臆断』、賀茂真淵『伊勢物語古意』、上田秋成『よしやあしや』などの近世古学者の説を批判的に継承し、著者独自の見解が加えられている。また江戸後期に学者たちの注目を集めていた異本のひとつである塗籠本の本文を多く採用している点も特色である。巻末に「奴豆能舍藏板」とあり、京都の書肆で宣長門人もあった城戸千楯の私塾鐸屋が刊行したもの。刊記に見える京都・江戸・大坂の三都六肆のうちにも「城戸市右衛門」、すなわち千楯の名がある。藍色布目表紙。印記「葆光文庫」（三田葆光か）「山崎文庫」。図録9。（一戸）